



13 録
459
33

消
福
永

重修真書太閤記四編卷之七

織田殿淺井朝倉と對陣の事

并山門の衆徒淺井朝倉と馳走と事

淺井朝倉の兩家牒一合せて坂本へ出張一信長と
襲らんとかや一信長の信長おの攝州の敵とさ一置
急坂本へ發向あるへ一として攝州中嶋と立を給
ひしうち三好黨とく一め石山本願寺門徒の與力
とも爰彼處に屯一是を尾人と謀りつとら木下
藤吉郎の奇計に挫く織田殿を取延一刺織田
方の兵士一人をも討得ざりしことを殘多く思ひか

同
會
攻
印

大開已四編卷七

めく爲方なりけし一の拳と握りて扣え居ける處へ元
龜元年九月廿八日四國の味方着船をり是ハ先達
て信長野田福嶋と責らる由聞えけるふより加
勢のためとて阿波讃岐の勢共三好彦次郎と大将
として篠原玄蕃東条紀伊守以下五千餘騎廿七日
ふ發船し直し兵庫へを付やうく尼ヶ崎へ着陣
さしうを野田福嶋ふ有けるもの共あられ今三四
日早めうを信長と打取へううし遅參の条殘
念至極せりと後悔とれともその甲斐あり但信長
坂本あて淺井朝倉と對陣してある由あり此方よ
り京都へ向て責上ることも眼前の敵と閣て京へ打

出るとあるへうう急さ打立兵士ともとて軍勢
と催ふしけるふ攝州の任人伊丹兵庫頭池田筑後
守茨木佐渡守荒木攝津守塩川伯耆守あれ等の信
長ふ頼まれて無二の織田方也三好切て上らぬ跡
と慕くぬといふもあう又三好左京大夫義繼畠
山次郎範高二人ハ河内若江の城ありて三好上
らへ打て出後と斷ん勢と示を攝州の任人等り所
領と經て京へ寄へさ道あけ三好黨ありふ
様よ切上る便もあく斯て日數を經るゑとあり
信長再度下向してゑの要害を攻んとするやう
然ハ當所の永陣然るへううはその上面々の領國

のそ大切あり早々四國へ引返し時節と待てしと
評定して十河安立東条篠原の輩打連て歸國の纜と
解けるあそ残る黨も今へ力あく野田福嶋と陣拂
し四國とさして出船しけるあつう自然と攝州表
へ静謐し及びひける去程し信長淺井朝倉の兩將の
山門又陣と取京入の長評定し時日と移しひき
信長攝州より引返し廿三日大津し着陣ありと聞
て誠しうねとう急見る見て参りてして使と立ら
しげり走り返うて實も信長大軍あて隊伍と正
し旗馬印あひたり逢坂長柄の峯し充滿たり
と注進をいひし淺井朝倉大に驚ら取者も取あへ

ひ叡山し攀上り鉢ヶ峯坪坂山青山等と要害とし
て楯籠る信長坂本へ着陣しししし淺井朝倉の勢
とも恐怖して山籠りてしししをおうしけし然へ
責ふとして翌日より叡山の麓へ押寄段々し陣を配
らせ給ひけるあつ香取屋敷と岩とて平手監物
長谷川丹後守山田三九衛門尉不破河内守丸毛兵
庫頭丹羽源六郎水野大膳等と籠置穴太村の附城
ふら依久間右衛門尉津田東市佑依々内藏助塚本
小大膳明智十兵衛苗木久兵衛村井民部丞進藤山
城守後藤喜三郎多賀新右衛門尉梶原平次永井雅
樂助種田助之丞佐藤六九衛門尉中条將監と差置

と田中村より柴田修理亮氏家入道ト全安藤伊賀
 守稻葉伊豫守と差向られ辛崎濱へち織田大隅守
 津田太郎左衛門尉佐治八郎山岡對馬守と入置將
 軍塚へち室町殿御出張あらせられ志賀守佐山二
 ヶ處の砦と信長本陣となしあへち近習馬廻り
 みて守り居たり織田方惣軍三万五千餘騎とを聞
 えし貝鐘の響と旗さしめり魔くありさま梵天
 帝釈の軍装もめくやとあめをれくあひたし信
 長守佐山入御すし師武藤五郎左衛門尉肥田
 玄蕃と召出され森三左衛門尉戦死の容子とさ
 めしめさし涙とうりて宣ふ様攝州して軍難義

なりし時も可成め働ふりて席口と遁とて度
 度ありとあふ残念め我側よ置川らんあち如是
 めなりと別ともあひりまよし此城の心元あさ
 差返して討死さしとの口惜さ然よとも九郎の
 能森跡と追て同道も趣さしそや然あそ信長
 う侍と大切ふあひり志も届さつとと悲歎の涙ふ
 咽ひあひしうの武藤と肥田の主と傍輩と見殺よ
 して救ふと曲事なりと仰ゆとらんと恐と居たり
 けりよ良ありて兩人共ふ神妙なり能由城と堅固
 ふ持あさしを其上大軍を引請て合戦よ及ひ川
 ると弓箭切者の者からてい殆ふし難さ處なりと

面々く賞美ありし武藤肥田思ひの外は面目
を施してけり浅井長政朝倉景恒の山上陣を取
てありける信長の軍を以て東坂本陣取し
を見て仰天し早く義景も出馬あるは由を申
遣りしけるは義景も更の打立て長政ふ力と
合とて國中の勢を催促し三万余人を率
一乗谷と首途し江州ふ打入上坂本千野仰木雄
琴苗鹿小陣を取て大箒いく川ともなく焼川け
しるを其燎天と焦しとさやうくあさうを拂て
見へたりあり朝倉の先鋒後鋒五万余騎浅井の兵

士四千餘騎あれさへ大軍なりし山門の大衆等三
千餘人一味同心なりけり都合六万余人及ふ
山上も山下も軍勢なりぬ處もあくその上は日吉
八王寺の峯聳えて要害ありし信長いづれに猛しと
も見上しは五十段百段の坂嶮く谷々峯々廻り
廻りて道ちるものなり攻上らんとこれに攝州陣は
勞し兵士とて氣力げらるるを勇まをの
荒手の越前勢を眼前に置いて切上るるに擬勢をあ
ひ浅井朝倉も大勢よて嶮岨に籠り川を近日有
無の一戦と決し雌雄を定むと評定しけるは
義景更も同心を以て只對陣はしるる軍を爲ともせ

さうし織田方も責うらる空しく日敷
と過しける處へ木下藤吉即攝州より馳參しける
織田殿の本陣へ伺候し何とて今更そ合戦を
始みさるよゆと申げと敵の大勢あて山上ふ
陣を取味方へ小勢よて山下ふ隊伍と立たり擔さ
列て責上らんとされい攝州表よて草卧し兵士の
みちり氣力とめい衰へつまば手強く責ん勢をあく一
日一日と怠緩より秀吉一方便しと見えやと仰ら
るしいより木下熟々思案しと申げりい淺井朝倉
の山上ふ心安く在陣仕い事山法師等り馳走申い
ふうてなれい如何あもして山法師等の心を取て

淺井朝倉一味の志と變とる様ふなりたさめのみ
てい也但山法師の元より弓馬の家又生さし者の
さるもいそいその上よ誰と大将と誰と侍大将
と申はもいそいぬい定めて心々の別々はていへ
因てまの衆徒と語ふと見とゆと存いと申に付信
長充と同意たりむひさるい秀吉の心よ任と策と
施しゆへと許さしけるあより木下その日より山
法師の内よて何某り當時上首よて然も有勢の者
なるゆと尋ね問ふ西塔の尊林坊と中へ江州長濱
の生さよて頗る富有なるゆと上ふ北谷の一膳なる
由聞出しとふとらそその僧の由緒の者と尋ねて尊

林坊のめとへいをけるい傳え承る當山の桓
 武天皇の御願ふて傳教大師と叡思と合とられ唐
 土の天台山と移され鎮護國家の靈場なりとらゆ
 然ら天子の宣旨と重ん公方の仰ふ從ひ四海
 靜謐の御祈とむ糸と被成べとふ尤いなう淺井朝
 倉の好と捨かこほさも貴さ蓮華八葉の峯ふ邪
 見殘忍の兵士と宿一五臺四明の巔ふ貪瞋癡欲の
 旌旗と翻一瑜珈三密の靈場無間奈落迦の衢とな
 う修羅鬪諍の有様と表とらるること抑慈悲滿行の
 學の窓と開放逸無慙の業と起一柔和忍辱の衣の
 袖ふ念怒熾盛の臂と張ると遠く山家大師の照

覽と恐とあめく近くい出家遁世の姿ふ恥めく
 や普天の下王土ふあささるる率土の濱王臣ふ
 あささるるいり淺井朝倉ともふ王土と監妨して
 貢税と奉らる王臣の列と離きとして勅命ふ応を
 ひ既ふ叛逆の朝敵なり山門の大衆如何ふとハ叛
 逆ふ與力一朝敵と馳走なりあふり山王一實の
 本旨と違ひ圓頓止觀の聖諦ふ背く尤恐るる尤
 怪一早く朝敵荷擔の約と變一海内靜謐の計を
 旋らしむひなる満山の法燈彌輝と三塔の規模ま
 そまを明らうたるる然てを沙門の体相あも
 叶ひ佛の加被もゆへけとと申送りめとも一山

の大衆久々浅井朝倉の檀施と受し上り信長と
宿意の志とあつたを以て偏頗の執情を移しうぬ
依怙の私欲を貪りて果敢敷返事も秀吉あつ
たひ浅井朝倉の朝敵と勅願の靈場も馳走せらる
あつた衆徒の迷霧くれさる故と存いあつた
兔用両家を奔走あるは力なり根本中堂山王
七社とくめ東西両塔横川無動寺飯室も並へ
たる三千の坊舎一宇も遺さば焼拂ひ百王鎮護の
法礎と滅しひ昔釋尊佛法と以て王法も附屬
しあへども王法と以て佛法も附屬ありあつた佛
法衰ふる時の王法と以てそれを戒むる所以なり

山門朝敵も與して佛法と衰廢と何ぞ王法と以て
嚴謹と加えさるべきんや宜しく満山評定して大
事と過川なりと重ねて申送りしもの老僧中も
これを聞付この事容易の儀あり能々思慮し
て返答も及あつたとして使者と返りし山集會して
評定なりしものも浅井朝倉の大勢あり信長へ小
勢しつちも長陣も疲色し体なれは始終浅井朝倉の
軍勝利なりしものもあつたおのひ老僧の評議も從つた浅
井朝倉與力の志とゆるく堅くわづけるふつち木
下のつちも佐久間右衛門尉稻葉伊豫守と使つて
利害と説しむることも山門更も有無の返答も及

あれふらう 佐久間も 稲葉も 怒と 含て 下向し この
上の山門とよの追討して 浅井朝倉の眼と醒とく
しとを議したうけり

勢州江州一揆蜂起の事

并秀吉佐々木承禎と服せしむる事
織田殿 浅井朝倉と 東坂本よ 對陣ありて 急よ 岐阜
へ 歸陣せし 備とつとよ ありて 亦他へ 出陣ありん
と一猶更ありて 寄りと見積りて 江州勢州の際
よ一揆蜂起して 濫妨大りて 就中 尾州勢州
の境なる 長嶋の者とも 数万人一揆と起し 信長の
舎弟 織田彦七郎 信興の 籠られける 尾州子 消村の

若と無二無三よ 責破りし 一の 信興終よ 叶らぬ 自
害ありて 去程よ一揆等よ 威と 振ひ 所々へ
打入 騷動ありける 勢州の 警固とて 在國
とよ 龍川 左近将監 一益ありて 鎮むるとの 一とよ
一揆の 日々よ 馳集りて 勢りて 龍川り 手の 者も
結句一揆よ 一味の色と 顯る けると 以て 一益も
あいらひありて 只 素名と 取とさる と 猛しとて
強ちよ一揆と 鎮めんとよ ありて 江州よ 浅
井下野守 久政 佐々木 承禎と 語らひ 所々の 御民等
よ一揆と 起さる 織田家の 持城と 責しめ 濫妨 狼藉
と なるさし むらふらう 坂田郡 百々 屋鋪の 要害よ あり

うて佐和山を押しつゝ丹羽五郎左衛門尉長秀
謀畧を廻らしあれを鎮えんとすつゝ一揆の奴原
一揆の奴原より取圍む合戦する由注進あり是ハ長
秀佐和山の礮野う許へ時々使者を遣はし安否を
問ひつ問はれつるに丹波守と五郎左
衛門尉といひし親しくなうけるに長秀ハ
坂本一揆の事ともうらんたり百々屋鋪
ふ江口三郎左衛門尉と残り置我身ハ五百餘人
引具して坂本と志し立出けるに一揆路次ハ馳
集りこれを妨げしるに長秀真先ハ進んで
と蹴散し一揆數十人打取し一揆原をく

競ひ集り数万人に及ぶに長秀心こゆハ猛
けいとも雲霞の如く蜂起し御民ともあれを如
何ふともそへ様なく始あはしとて見へける
處へ横山の留守と預け居ける竹中半兵衛重治ハ
とを援げんと五六百餘人と帥ひて馳來り一揆原
乃ろろ切掛し一揆原に散亂す
おどろき蜘蛛の子とちりびおろしに散亂す
竹中長秀ハ面會しきと坂本一揆越
あゝ御越のやあらは重治ハ任せ
長秀實とておどろきおどろき竹中殿ハ任

セ奉^たり^ます^る急^いに坂本^{さかもと}一向^{いっ}ひて馬^{うま}を馳^はせ一揆^{いっ}原^{げん}
一度^{いちど}の遊^{あそ}びたり^ます又^{また}寄集^{よせあ}りて竹中^{たけなか}と取圍^{とりこ}て討^う
くやと^いひ^まし^ると重治^{しげち}の^の数^{かず}ともを^と静^{しず}み人^{ひと}
数^{かず}を^いひ^まし^る横山^{よこやま}の城^{しろ}へ入^いりて木戸^{きど}く^と差固^{さこ}め^りの^い
一揆^{いっ}横山^{よこやま}と押寄^{おしよ}城^{しろ}と取巻^{とりま}て急^いま^すこれと責^せ重治^{しげち}さ
ら^に驚^{おど}ろ^か色^{いろ}々の^の嚴敷^{げんしき}防戦^{ぼうちん}を^しる^まと^し一揆^{いっ}の方^{かた}も
手負^{てお}死^し人の^の負^おけ^い増^まとも城^{しろ}中^{ちゆう}ま^ての^い一人^{ひとり}も傷^けま^らぬ
一揆^{いっ}共^{ども}寄集^{よせあ}り如^{ごと}く責^せめて^い味方^{あじかた}の損^{そん}を^とる^ま計^{けい}あ^て城^{しろ}
と落^おさん^と思^{おも}ひ^ます^る然^{しか}ら^に方^{かた}便^{べん}と替^かて^い攻^せへ^り
とて一度^{いちど}の^いま^の引退^{ひきひ}る^まと^し長秀^{ちやうしゆ}坂本^{さかもと}も至^{いた}
り一揆^{いっ}の容^{よう}子^こと^い言^い上^あり^まし^る打取^{うちと}処^{ところ}の首^{くび}とも少^{せう}々^々實^{じつ}檢^{けん}

ふ入^いり^ます^る信長^{のぶなが}丹羽^{にのへ}の武勇^{ぶゆう}と賞美^{しょうび}なり^ます^る木下^{きのした}
郷民^{きやうみん}共^{ども}と取鎮^{とけちん}めん^と思^{おも}案^{あん}あり^ます^る木下^{きのした}
藤吉^{とうきち}即^{すなは}ち進^{しん}み^ます^る出^い郷民^{きやうみん}共^{ども}の蜂起^{へうき}と^し事難^{じごん}義^ぎふ似^にて
ひ^いへ^りともその原^{はら}を尋^{たづ}ね^ます^るの^こともひ^いま^す
く存^{ぞん}ひ^ます^る且^{かつ}當所^{たうじよ}の体^{てい}と見^みひ^ます^る淺井^{あさい}朝倉^{あさくら}との^い急^いま^す
合戦^{くわせん}と^いひ^ます^る様^{さま}の^い見^みへ^りひ^いま^す然^{しか}ら^に此^こ隙^{ひま}も一揆^{いっ}原^{げん}
と切鎮^{きりちん}め申^{まを}へ^り信長^{のぶなが}大^{おほ}悦喜^{えつぎ}あり^ます^る何^{なに}様^{さま}とも秀吉^{ひでよし}の
心^{こころ}不^ふ任^{にん}を^と計^{けい}ら^ひひ^いま^すと免^{ゆる}され^り藤吉^{とうきち}即^{すなは}
つう^とも五十^{いそ}餘^{じゆ}人^{にん}と引列^{ひきり}て道^{みち}と急^いま^す石部^{いしべ}の城^{しろ}も至^{いた}
り佐々木^{ささき}承禎^{じやうてん}入道^{にゅうだう}も面會^{めんかい}を^とん^とと申^{まを}入^いり^ます^る秀^{しゆ}

吉一人入城あるへこ由と申出しうへその如くふ
 して本丸入承禎入道ふ疎遠なる口誼を述い
 る承禎入道もむうしの木下藤吉郎あはれ今
 一城主あて歴々の大将ふたること賞歎しうの何
 故ふとるく問としそとありげらるる秀吉申様
 尊氏將軍家より以来代々室町家ふ忠勤あはれ佐
 佐木の御家より前あは三好といふ細川被管の者
 の下風よ立て公方と輕蔑なりむ終ふ御本領と失
 をせられ如斯体あて在る戦の罪とあはれめをま
 背りてあは故と知し食へ今ま斯波被管の朝

倉京極家臣の淺井と一味なりむ御民共と語をせられ一揆
 と起しあはれ六角累代武勇の方々善とあはれあはれ
 へと拙しと御覽とへ能々御思慮あることばく雑
 の口とある共牛の後とある無と申こともいあはれ信長
 坂本ふ在陣し足長ふ働さいこたわれ萬事合期をい江
 州と取返さんとあはれめは何六角の旗とあはれあはれ
 只今淺井も叡山ふ宿陣していられ小谷へ久政とあはれ
 家中一致仕る能時節ふ六角の御旗と以て小谷を打落し
 むとてこれと切として先年の不義と御言あはれんあは
 佐々木六角代々の忠切を思召も忽し恩免あるへ江州守
 護と返しむとんこと勿論よいゆの如何なる天魔の所

為の御民共と御頼ありて家僕ふ等とて浅井朝倉ふ與力
しむとて僻事と申へと申せし承禎入道も秀吉の
智謀あるを久敷間保上のことたれは秀吉のいふ
處何様道理至極とると思ひくへ速に浅井一味を變へ公
方奉公の忠義と存とて之間先年御敵とたれし罪を御免
ある様取たり給へといへと秀吉を一向小頼とていふ秀吉
その義へ心易れと頼母言示し秀吉出城しけしハ
承禎入道とてやうに二揆原小觸てをさうく面々の在所
へ引取をし江州へさて鎮うよけり

重修真書太閤記四編卷之七終

重修真書太閤記四編卷之八

佐々木承禎織田殿と和睦の事

并堅田合戦坂井政尚の事

江州處々ふ一揆蜂起し織田方の城々と責ふ由注
進ありけるふり織田殿大に驚うせむ小木下藤
吉即よ急に静謐とむむ由を下知ありしりち
藤吉即よ一揆の根本と探り知近江國石部
の城ふ至り佐々木承禎入道ふ面會し將軍家へ出
仕して先祖の芳跡と相續あるを様を勧めける
ふり承禎入道も時運と察しうり小木下り先年

より以来謀りぬる事とてその機小應せさ
るべく度々の勲勞あり今一城の主とあり
織田家より一二と争ふ侍大将あるを以て
秀吉の言葉小就て將軍御前の首尾を取成給
ひてと申けるより秀吉然に御手小属と
共へとの旨と申觸るべしと約定し秀吉を坂本
立歸りけり

元龜元年の佐々木承禎入道隱居のち十餘年
嫡子義彌廿五歳ありつ承禎の妹とあり本
願寺顯如上人の室家あり
信長秀吉と待迎へらと江州の始終と問尋ありて

今ふ始めぬ秀吉の智謀と感心ありけしと秀吉川
つしんで始り一揆と起せし江州の地下人とも
佐々木の恩と思ふと厚く何事もあは六角
殿の御為と思ひつる處へ本願寺あり頼と越え
る即承禎の下知ありて如斯一揆蜂起とあり
六角家とて當方へ歸伏せしめは一揆との川
あり静まりゆへと思慮しゆひり果して承
禎降参仕りゆとそのや一揆をの川う鎮あり
ては程なり承禎入道参上仕りか尤なく使者以
奉るしとあてゆと言上しける処へ承禎の家老三
上伊豫守三雲新九衛門尉二人坂本へ参上し承禎

入道并義弼の口状として今度將軍家へ出仕の
事偏し信長の進退に任を奉る由と申述種々の國
産と獻上ありしに信長大に悦びむの兩使
と厚く饗應の上木下と付て將軍の御所東山將軍
塚へ參上せしめしに將軍家も織田殿の執申さ
るゝ如し木下り同道とありし別み仰ら
るゝ御旨もなしく速に御前へめし出さる承禎入道
父子ともみ味方參り忠節可仕条神妙ありとの
上意と傳ふこと由兩使へ仰出さる江州靜謐
の事として六角家も任をらるゝ由御教書と下さ
るゝに兩使も兼て思ひしに將軍御前の

首尾よくし厚く木下り執成申せし故と
大に悦び將軍塚と退出し坂本へ歸り參りしは
信長りしに面會ありし承禎入道忠節と奉存
候由に國家靜謐の基めて大慶こそよ過を早く御
教書の旨に從ひ承禎入道に申達ししに仰られ
使者もい太刀馬と賜らるゝに兩人石部へ
罷歸り坂本の取扱ひ木下の奔走將軍家の御沙汰
残る處なく披露せしむる承禎父子大に喜む尤あ
らんと知たしに何しに使者とら上とつと父子の
内一人出仕とせむにけるものと三上三雲に御
前の首尾と却て羨むにけるものと早く國中郷民等

に將軍の仰と觸傳しうい一揆の大將とも何あも
あま屋形の御意よめを従らめ別の意願ひと
て面々の在所とと取鎮めけるあまう前々
と猶穩しと成よけう信長この由と聞食と木下
と召て宣むける今こそ其方の策ふりて江州
に鎮めつともゆくの如く淺井朝倉と對陣し
て合戦も及らぬ月日を過つる内ふ寒氣次第
に加らう下々難義をへて因て淺井朝倉へ使者を
遣らう日と約して有無の一戦と遂へて申送り
ふ兩家も何とも返答申越と是と何とらわめ
ふと仰らまけるふ秀吉申けるを淺井朝倉御使の

返答と申さぬを殿の怒らとあまて山上ふ向とを
あま切所は支て戦らんことを計うま殿の退屈
あうて御歸陣あうの御跡と慕ひ申さんと思ふ
故なるへ然の怒らとあまとあく退屈せよとあ
ふまのためふとて言上し然兵糧運漕まとい往來
自由のためふとて頼田ふ船橋と掛こし奉行ふ
あ松原新九衛門尉村井新四郎兩人とを置とける
是ふ於て長光寺觀音寺百々屋鋪横山番場醒井の
通路たゆとくあうし陣中更ふとさ
く對陣あまひひる十月もりし暮て十一
月半の空さとて比良山下嵐とけし吹曉の霜ひ

冬のよきちくあり増きの陣中の下々難渋して
 寒く手足凍て篝火のよと頼む様よりゆげを信
 長聞食いつと限りと云ともなき長陣ある理と
 ちあひひちうう始終如何と心勞なりあふ処へ堅
 田の郷士猪飼甚助馬場孫次郎居初又二郎といふ
 此の三人ひそみ織田殿の陣へ申上げりる面々住
 居仕る堅田の里の要害の淺井の兵糧藏より然ふ
 處に大將と一人差越さゆと御案内申て乗取を
 申べとにしくいと言上とさうい信長も何事も
 と思召ける處ていあう殊の外に喜そをまひ誰
 堅田へ行向ひ申つと一座と見渡しあへとも何

由味方と離れ敵地へ踏込とゆ急某罷り向ると
 申出るゆのもちの
 坂本宇佐山より苗鹿雄琴川をとと過て堅田
 まで今道一里半より遠し堅田の南北へ長と村よ
 して淺井の兵糧藏の浮御堂の地といへる東堅
 田なり
 信長もまゝ誰罷向ひゆへとも仰られと見合をま
 へゆける處は坂井右近將監政尚進と出某馳向
 ひゆるとの存ゆ得共味方と放と大事の働され
 候間見合せゆひと別と所望の方々なくは政
 尚みゆるをあふと望申げれ信長何様所

望よ任とへし但其方の勢計よて如何とて安藤
伊賀守の家臣安藤右衛門尉氏家ト全ウ郎等衆原
平兵衛御目代織田甲斐守都合一千五百餘人と
差加えらる十一月廿三日の夜件の猪飼馬場居初
と案内者として密に堅田浦へ押さるる岸へ着と
そのもの猪飼馬場居初の三人兵糧を入置し寺中
へ忍び入る相圖とてけい坂井右近將監とて
乗入と一同に突立切立駈たけり浅井朝倉の侍
共思ひも寄ぬとて散々切せらる右往左
往小逃失さる坂井得さると真先よ進み難なる堅
田の御堂と乗取けり

一書十一月廿三日の夜堅田の猪飼馬場居初
味方よ参り浅井朝倉兵糧奉行百五六十騎よて
籠り居たりと坂井右近一千七百餘人よて責入
五十三騎打取しとけり或は堅田の祥瑞寺の
事なりとゆゆ
信長此の聞食右近將監ウ武功拔羣ありと感福
も堅田の兵糧を棄てしことを聞て大に驚き味方の
兵糧ハ堅田のよふもあつたこの惜ともおも
も堅田の里と敵よ棄られし小谷木本の通
路近頃難義を如何とせしと評定ありけり

大月巳四編八

義景ハ惣軍一度ニ信長本陣へ切入有無の一戦
 と遂々やとり長政聞て義景の申さるる処との
 理なりとあはれ給ともいふも盡され敵志賀宇佐
 山兩処の要害ニ籠つては押寄るとも容易く切
 て入るを得ずと猶豫とるるも防戦の鉄炮矢
 石のためは味方の多く損とて長政存とる處
 ら今宵敵は加勢の着とぬ内は堅田寺へ押寄坂井
 と打取寺内を取返とてと申さるけれ何も此
 義は同一然ハ手分とてとて朝倉式部大輔
 山崎長門守前波藤右衛門堀平右衛門中村丞丞等
 と先とて越前勢三千餘人と先陣とて浅井方と

うの赤尾勘久浅井七郎田邊平内八木又八郎等二
 千餘人赤尾美作守と後陣の大將とて廿四日の
 東雲の頃より堅田の寺へ押寄たり坂井右近
 將監政尚ハ堅田の寺内と乗取より敵も定めて取
 返さんと思ふらめその用意あきてハ在難しと一
 千七百餘人と三手に分て待居たりける處へ浅井
 朝倉の兩旗よて五六千程押來ると見て右近將
 監とて騒ぐに五百餘人よて町中へ打て出指
 突たりとて待りけたる朝倉式部大輔景鏡山崎長
 門守とて是と見て敵ハ油断してあきらんと
 おのひつる小町中よて僅の勢をらり出し備と立

て待りけり心悪く振舞うな加程の勢にて我等
の大勢を引受軍とんと志の不敌さる龍様のお
ふも者も掛合んと難義うなと大将あゆまこあめ
あひ士卒四度路に見へける色と右近見らるる
先は進み鉄炮三三三つ打とその煙の下より鎗を
入從横無尋と突廻り追詰く軍して首とも少く
打取手早く寺内へ引上たり朝倉三千餘人坂井り
五百餘人切負しうとも山崎長門守引返り再度
押寄んとひりめさけり

坂井右近勇戦の事
并松平勘四郎信一武勇の事

坂井右近將監政尚一戦は朝倉の三千餘人と切
崩し首とも少く打取手軽く人数を引揚堅田寺内
へ引返り諸卒とくめ息継兵糧つりみて居たり
ける處へ淺井朝倉勢雲霞の如く一手ふりて押
来りしつりなる御堂のゆへと取巻無体ふ切入
んと攻立る右近は期したることをなれを爰を專
途と防戦と然共元より要害なく堀一重の寺よて
あり敵は案内知たり堀は手とりけ乗入んとか
しけるとて右近大に怒り言甲斐あるものな防
うとれら龍様は敵を間近く寄付るなりいて我
蹴散て見とへしとて寺の門と左右へ押ひらる馬

の鼻を敵に引むけ鞭をあつとに相従ふめの共一千餘人おめてもあつて懸たうけり右近先は好川の軍あつち負長子久藏とらふを残念よあめひ此とびくそをかく敷軍して討死せよとゆと思ひあつたつまに取こさ勇々敷見へさうけり浅井朝倉の勢へ大軍あれた坂井う小勢なるをあつと居たる處へ右近將監會釈もなく切て入戦へる右近う即等坂井十助浦野源八主よあつとらむ馬けるふらう朝倉が勢若干討として色めさ立その跡より此地の案内者たる居初馬場猪飼の輩坂井と討せてい何面目は大将の御前へ出べらんやと命を限

うは戦へち浅井朝倉大勢なれとも切崩され立足しとらう敗走に朝倉式部大輔山崎長門守赤尾美作守諸勢と下知してあつとの小勢も切立らるるといふとあつた怯る人々の振舞やと或は勵まし或いはさめの新手と入替く責しう朝倉勢の中より堀平右衛門馬場孫次郎と目ふ懸て切て掛りあめふりと戦ひ終は兩人さ違へて死したるけり是を初とて中村李丞の坂井う即等浦野源八と戦ひけりこれ相討して右と左へたふとふと浅井う家の赤尾甚助の居初又次郎と突合けり居初手と負危あつと處へ猪飼甚助うけ來り

赤尾と切伏首と取さて又淺井う勢の中より淺井
七郎田邊平内八木又八郎いつとも粉骨と盡し戦
ひけるも赤尾義作守味方討とふ續け者ともとい
ふまゝに真先は進め朝倉勢も劣らしと掛たり
けり式部大輔長門守藤右衛門等いつとも透間を
く進んで戦つゝ坂井右近将監二ヶ處手と負る
ら少しもひもつゝ進み戦つゝ前波藤右衛門是こ
そ坂井右近将監願ふ所の敵あれ我討捕んと駈向
ひ朝倉勢の中あて前波藤右衛門いご參りひらん
と鎗と取て突けけし右近心得たりといふま
まに鐔元迫血は染うたる大太刀とふりゆさし戦

ひけるも前波うらり出に鎗のひる巻際と右近あつ
ゆは切られい終ふあらへど切折たり前波太刀と拔ん
ととる處と右近得さうと大太刀を以て真向へ切付
たり前波手疵と請あうらうけ寄て無手と組右近も
同し太刀と捨て捨合揉合しける右近力や増り
けん藤右衛門と組しと首と搔切て立上る然共右近
力疲さうつ即等大形討死さうら今は是迫を雜兵の
手よりらんらうらと鎧脱棄腹十文字は搔切打伏
たうらて死したうけり織田甲斐守も寺中と般手出
て戦ひけるも右近討死さうら聞らる是も同く敵
中へ掛入亂軍のららふ戦死たり

織田甲斐守流布の織田系圖小見へは因て考ふる所あり
或云織田彈正左衛門尉信定の末子與康の事あり
この事その實を知

坂井即等坂井十助浦野新八主の自殺と聞ゆるも敵の中へけ入
あつたに戦つて討死せし遠州より加勢として来りし松平
勘四郎信本多百助信勝ら輩五百餘騎とて今朝とて宇佐山と出
て廻り来りける堅田に合戦あると聞ゆるとりて駈付たりし
と云織田方敗軍して甲斐守右近將監と初諸侍多く討死せし跡
ありし桑原平兵衛安藤右衛門尉猪飼甚助三百餘り心々小戦
ひ居たり勘四郎信二百助信勝をせ付けていりし旁ゆる亂軍の
内討死して何の功ありし二人なりしとも無事引退き後日

の合戦小功を立らるるしとのさめりし打殘されし軍勢とて
先よ立て本多松平の二人後殿して引退く淺井朝倉の勢と
も退くとして追掛けし松平勘四郎本多と呼近はけ御邊
この軍勢と引具して本陣へ心さし退る某を止りて防
ぐと云とて鎗と取て大勢か駈むる弓手馬手も駈立
しこの兩家の勢とも突立られ立足四度路は敗走とれ勘四
郎も是よりなるとして引退くを見上げ堀江源五郎馬を飛して
こを來り正しくも後と見せもあつたと呼これ信一と振
返り悪し汝りめのいひやうやとこいひさし引返り鎗と合
とる間もあつ源五郎と突落し直に飛下り首を取せ
めて野遊の手土産とていひつゝ馬も打のりて引くことと

大岡記四編卷之九

浅井朝倉の勢とも付あつてとてけり山崎赤尾
制めらる追うげされい信一静々と馬と歩やをて守佐
山引返し合戦の次第と言上と信長聞食坂井主従
討死を惜と勘四郎の武功と賞美ありとてけり
流布本この時勘四郎伊豆守百助刑部少輔と改む
とあれとも信一伊豆守と改めし慶長六年うへ
本多の刑部少輔考ふる処なり因てあれとてけり

重修真書太閤記四編卷之八

重修真書太閤記四編卷之九

織田殿軍評定の事

并木下藤吉郎退軍と勧る事

坂井右近将監政尚堅田よ於て討死し其手の士卒
多く討て織田方よ於て少も勝利を得さる事信長
深く歎さるひ森三左衛門尉といひ坂井といひ世
よ勝をたりし侍二人を失ひしと残念ゆるめとな
し去とて有へとてあつてね一向軍の評定をか
しむひ浅井朝倉と討て日頃の誓懐と晴さんこと
議をらるるよ時とてよ寒空よむくわ比良の高

大岡記四編卷之九

根の雪積り陣中凍く敷あり士卒等大小苦疲をけ
るを以て再度評定ありける此より以て對陣して
日數經い味方以外に困窮とて去とて一合戦
もを以てこのまゝに引取んとも殘念也如何とて
や面々の所存と遺さば申べしとありしりとも諸
將いづれも口と箴んて一言と發を以て互に見合て
の居たりけるよ木下藤吉即承らる何様この体
あて何道かろし海をへて日と過らるちよ士卒退
屈してその上ねけくよ落る者出來いへしよ浅
井朝倉よ向て花をかゝる軍をとんと敵要害よ
うと隠といへち叶難くいへしや在てい此処よ長陣

おしゆと味方のため宜しうあましく終りの敗
軍の基と存い能々賢慮とめくらされ早く御退去
あらんと上策と奉存いあらるち此儘よ御
退去あらんも餘りよ云甲斐をらるし君御威光
も失らば諸軍の勇氣とも損さばいんあな如斯
御らるしひあうて然るしくひと申上し信長
手と拍て悦ひあひちりる長々對陣して一度も合
戦よ及らば敵出さといとく此方より仕掛を以
今より兵を引退去をとんと餘りよ無念なりその
上敵方より森坂井をらるめ歴々多く討取よ刺信
治信興たこと討とて口惜とも云計なり是等う

六月廿四日編末し

為^{ため}し弔^{たづね}軍^{いん}してさてのちふあそ木^き下^{くだ}り申^{まを}旨^{めい}ふ從^{したが}ふ
 へげとと宜^{よろ}ひしうい秀^{いせ}吉^{きち}さふとよ思^{おも}召^よんよ一^{ひと}
 度^{たび}山^{やま}上^{の上}へ向^{むか}ふととあふへ併^{ひら}向^{むか}ふととあふとよその
 甲^か斐^ひ更^{さら}ふあるましく且^{かつ}い長^{なが}陣^{じん}ふ退^{たい}屈^{くつ}して心^{こころ}氣^きと
 もい疲^{つか}と一^{ひと}の共^{とも}也^{なり}但^{たゞ}この疲^{つか}とたる体^{てい}を敵^{てき}も大^{おほ}
 形^{かたち}推^{おし}量^{りょう}してあるへげといを以^{もつ}て一^{ひと}方^{かた}便^{べん}して
 見^みいへ其^{その}謀^{まう}ハ如^{ごと}斯^しと言^い上^あしけるふより信^{のぶ}長^{なが}ふ
 も甘^{あま}心^{こころ}ましくいてさうい其^{その}通^{とほ}り行^いふへとてま
 川^{かわ}諸^{しよ}方^{かた}よつけ置^おて一^{ひと}大^{たい}將^{しやう}たちを悉^{ことごと}く本^{ほん}陣^{じん}へ呼^よ集^{あつ}
 められ仰^{あや}出^でされけるい如^{ごと}斯^し對^{たい}陣^{じん}数^{かず}月^{げつ}ふ及^{およ}ふ時^{とき}節^{せつ}
 まる寒^{かむ}氣^きふ向^{むか}ひ士卒^{しそ}ささうし難^{なん}義^ぎなるへ殊^{こと}よ

ふ畿^き内^{ない}の兵^{へい}糧^{りやう}と運^{うん}漕^{そう}とれとも容^{よう}易^いのことよあふ
 移^{うつ}る分^{ぶん}國^{こく}こととる為^{ため}に困^{くわん}窮^{きゆう}とへ
 三^{さん}万^{まん}餘^{じゆ}人^{にん}一^{いつ}日^{にち}ふ現^{げん}米^{まい}三^{さん}百^{ひやく}石^{せき}と費^{つひ}を一^{いつ}ヶ月^{げつ}あふ
 九^く千^{せん}石^{せき}より四^し斗^と表^{ひょう}二^に万^{まん}二^に千^{せん}五^ご百^{ひやく}ふ及^{およ}ふ二^にヶ月^{げつ}
 ふい四^し万^{まん}五^ご千^{せん}表^{ひょう}ふ及^{およ}ふ
 然^{しか}らハ諸^{しよ}方^{かた}の患^{うれ}なり因^よて殘^{ざん}念^{ねん}云^いふううううううとと
 も此^{こゝ}度^たハ引^ひ返^{かへ}とへく思^{おも}ふなり面^{めん}々^々其^{その}心^{こころ}を得^えいへ
 と申^{まを}こころされられハ諸^{しよ}大^{たい}將^{しやう}たち陣^{じん}々^々ふ歸^{かへ}り信^{のぶ}長^{なが}
 の仰^{あや}を傳^{つた}へけるよ諸^{しよ}士^し異^い口^く同^{どう}音^{おん}より申^{まを}ける様^{さま}士^し
 卒^{そつ}の困^{くわん}窮^{きゆう}と國^{こく}郡^{ぐん}の難^{なん}決^{けつ}ととあふしめさる如^{ごと}斯^し迫^{せき}
 糴^{じやく}付^つし陣^{じん}と御^ご引^ひ拂^{はら}ひいそんと嘸^なじ御^ご無^む念^{ねん}ふ思^{おも}召^よ

へその上諸陣々退屈して疲勞をうへ山上下り
 能々見知てゆへけい味方當処を引拂ふをや
 うその中に見物していひまゝ必淺井朝倉の兩
 勢山より下立跡を慕ひいへ其時味方の勢へ引
 立たる処といひ疲勞をうへ士卒らう見若く追截
 られ敗北をんと疑わくひ然へ從ひ奉りし三万餘
 人の軍勢永く弓箭の名を失ひ武勇の譽を取めく
 いろん御歸陣のと今暫く御賢慮と廻らされ然
 るへくと一同お申上げる由を披露さうり信長
 向て合戦とれとも更に我身の榮耀をおのよみお

らは一日もゆるく天下と靜謐をうめ万民安堵の
 枕を高くたさしめんう為らう然へ信長う身の恥
 辱をへ顧るよ違あう此数月長陣して仕出した
 ることもなく引返さんと柔弱の様お聞え社士とも
 の心中ある云甲斐ある信長うらわのよあるべ
 こと此方お察しおめひわうう如斯仰出さるし
 と全く國郡の費と大勢の疲勞をおのより故らう
 但此大軍の退口と敵お追とらへ頗る難義お及ふ
 へ其段へ面々の心中おあるへけい十分お精
 かと盡されいへ先歸陣の用意と急くへと下知
 とらとさうら諸將も詞なく畏奉る由御請申て各

本陣へ立歸り未々やてその昔と申觸専ら陣拂ひ
の用意をふと浅井朝倉へ山上大衆のめてた酒
み酔いさても疲勞の色なく織田家陣中退屈の
体とて心地よく思ひ一身拮据し飽て他の
飢渴を笑ふと抑塵勞の雑念と息て般若の法林ふ
遊ふ徒の心ちらんや偏ふ邪見我慢の所態といふ
へ然る織田家の諸陣々頻々立騒く何様只
事ふいあると山上向て合戦を挑むり又
と爰許と陣拂とるるの陣拂とるる味方
の逞兵と以て追打し撃へと酔中も油断を
賢けふ見えらる舌滞くと語定らるる踏締

力足い響けとも歩めの高低齊しうら徒小擬
勢とあり又日を暮と然る十一月廿八日織田家
の陣中別して物騒く見ゆるふり浅井長政
斥候を出して是を窺くむと明日信長
當陣と拂て歸國とる由を聞出し如斯と告ぐら
長政義景大に悦び實も長陣小疲とるる左もあ
る九月の末らう今寒氣の盛うなる時節に至
り侍も足輕もさるる疲と川らめ然ととも山王七
社の照覽するもさへ山上向て一箭射しともな
く空敷引返とて勇猛熾盛の信長とて苦惱と堪
とと知きたる神速も用意をなして明日信長の跡

を追てあまを撃い味方の勝利決定とて俄に諸
手へ下知を傳へ兵糧を炊ら馬に秣飼山上も暴
騷立たり信長へ廿八日の夜深く諸將を呼集め面
面用意整ひしやいと問をあへる何も兵糧つ
うひ馬に秣飼何時も打立可申支度調ていと
申けるよもう信長密に仰出さしける諸陣の中
あて格別な疲労とし者らあり擇て曉寅の刻に松
明を撃けて引續き退く休とて三井寺の山蔭に
至りて會圖を待たし疲勞の少なき侍らあり
と勝て面々の陣を明し様小持なり却て陣の後
埋伏して敵の寄るを相待し敵來らむ待迎へ

戦ひを決して縦に切勝とも山上へ追昇ると有
へあり各々の陣々を守りて重移り下知に従ふ
奇謀と會得し最りありたさこみては淺井朝倉
の兵山上より切下りいと何れとの事なり
只一舉に蹴散して捨んとするのをと勇を悦ひて
や又刻の終なり寅の首由程近し面々用意仕る
しと手勢くと引分て三井寺へ向ふめいと陣の後
小伏りのと定め松明篝を明らうし焼如何も只
今打立引退く様に見せそのち信長の本陣より
木下藤吉郎を残り置旗本の兵士らありと引

て寅のころめり宇佐山と出む三井寺ふ入御あ
りて木下り相圖と待あふ木下本陣ふ止り寅の鼓
と打頃ころして兵士等ふ松明とるさと二行よ立
て宇佐山より織田家の大旗小旗を先よ立大将の
引あふ様見とて陣々より白松明を打振く
前後の次第と正し行列を亂さ引退く様あふ
秀吉一人宇佐山の頂上よ昇り敵の容子を見て會
圖をなさんと待掛たり

元龜元年十一月廿三日坂井右近堅田の満月堂
を乗取しうい廿四日淺井方より赤尾美作守淺
井玄蕃と大将とて二千餘騎朝倉より朝倉式

部大輔山崎長門守と大将とて三千餘騎合せ
て五千餘騎よて相寄無二無三ふ戦ひける初
み右近切て出走り回りにて下知をれとも淺井朝
倉の多勢よ取圍らる右近討死をうらその手
の兵士浦野源八父子坂井十奴馬場孫次郎居初
又次郎も討死をうら其後室町殿の上意ふ
より淺井朝倉織田三方和睦整ひ十月十日信長
岐阜へ還御なりしといへり
織田殿宇佐山退陣の事
并淺井朝倉織田勢と追事
朝倉九衛門尉義景淺井備前守長政兩家の軍勢織

田家の退陣と追撃とをゆと宵の程より支度して
 相待けるよとて寅の刻よりもなりしころ敵陣よ
 おひたししく松明ととちり連らゆ出立つとて体よ
 見えしういれとちり敵へ退くと追撃は打とんとと
 恐とて深夜も退と覺へたり早く追搦追々待ふ
 をして高名とてゆ人々と云程あそあそ兩家の軍
 勢我もくと打出るよ山法師若大衆あそ興あると
 に思ひ同じく續て駈出し麓をさして馳下りける
 か元より三月よ及ぶ長陣のよよていあり織田勢
 攝州より馳登りしよりなれい別して退屈をい体
 とたしし見知たれい實も退ぞとあめひけるも

理なりしよの隊伍も調へ心々も追搦たり既よ
 山下も馳下り敵の陣々と伺ふよ軍兵一人も残り
 一休をくらしも寂莫く焼捨たる篝のよ火影灰よ
 てらしたり浅井朝倉の勢ともあそよとて能遊足
 のよゆゆりしと去とて遠くへ行なりしに松明の
 光よ就て追て行へ大津打出のあたりは追付
 へし急げくと馳たりけりその勢宇佐山の下を過
 けりよと木下藤吉即山上ありとくと見濟し時分
 けりよとと相圖の狼烟と揚たりしうへ今もて人氣
 無りし織田家の陣の後より関を作りて數千の兵
 士貝鐘の響と共よ打て出鉄炮を稠敷るちちけ

浅井朝倉の勢と喫留んと責付たり秀吉の勢三千
餘人の宇佐山の上よりくま伏て聲の限り鯨波を
作りけしその音山澗ふひくさ遠峯みあさく
天地も覆へり岩石も砕くるくまゆふ聞へり
浅井朝倉の勢とも大に驚き狼狽し前後も知を敗
走を浅井侍大将赤尾美作守叔の敵またくま
一を備と列て戦へと呼られとも散乱したる勢の
くまをれを耳も更ふ聞入を心のまに逃たり
けり織田家の軍勢ともこの日頃の鬱氣ともら
さんと取てい返り返りてい戦ひけるまら三井
寺も退たりけるの追皆引返り浅井朝倉の勢

と断切く七八段ふりて責たる浅井朝倉の
勢へ三万餘人織田家の勢へ二万餘人なりとも此
方へ兼て期したる謀なり浅井朝倉の思ひも寄ぬ
ことなれへ周章さくも理あり一方を切抜山上へ
逃上らんとくまへ路暗くして敵克々たり敵も
めりて戦えんとくまの鉄炮をくまのくまの打つて
烟面と障ふ信長三井寺の後の山の上より此体を御
覧ありて馬を真先に進めを駈あへ夜へるのくま
明くさく横雲の空の泣まさら飛く鳥の影大旗
小旗ふくまのくまのくまの景色なる近
習馬廻りの壮士とも願ふ處の幸をとくま切て勝

大司巳日扁巻乙

このれい浅井朝倉の勢總敗軍となりてこそ朝倉義景の最前み打て出たりける信長の奇計も落入りてすしとて真先より返り浅井長政のあまうりゆるゆりて大勢み打つこすれ既より危ふく見えけるを赤尾美作守らるゆみ見付漸と救出し道を求めて敗走をその餘の歴々何も敵に打合ふてもなく只逃得人とて心よめて八方へ走りゆく織田家の勇士も追討も骸の野徑に切倒され首の後輪み付らきたり朝日ららんとこそ上り草葉の霜の白うらり血もあはれて時たぬ紅葉の色をふりめあうこそ追詰られ押えて首をうらりもあう顛越ふれと援け起さんとも

と云ふ父子兄弟あひのゆきよ逃走り手負ひ幾千餘人と云ふとをうらり辛くして山上へ攀上りあえむく息繼居たりされとも信長嚴重下知たりあひあはれと追とあはれぬい浅井朝倉も甲斐なる命生たりけりそのうち信長宇佐山の本陣へ還御すし師首實檢の式を行われける柴田修理亮勝家の手へ首数三百十一池田勝三郎信輝の手へ二百四十三木下藤吉郎秀吉の手へ百九十五佐久間右衛門尉信盛の手へ百九十三丹羽五郎左衛門尉長秀百八十七蜂屋兵庫頭頼隆百八十六明智十兵衛光秀百廿四佐々内藏助成政九十五稻葉伊豫守通朝七十八松平勘四

大開己日編卷九

大開言口糸ナナ
役所を持固めて居たりけりされとも山上よへ
へ能信長の奇策に懲りと見え勿々責下るる勢
もたつて必勝とあゆひし軍を仕損多く兵士と討
せしこと愁ひ如何とんと評定も有り有ることも
一定といふは謀もなしく空敷日を送りけるも
ふ天氣いよく寒空よ向ひ霰まゝの雹なりく降
何となくのうたうた故卿の事をも忍らねど打
出へる勢もあつて暮しける山法師も氣の毒は
おのひ昔より山門に向て軍をのめ勝利を得し
ためしなりとあつて建武延元の昔語りは氣力
を慰め馳走とると大形なりけり

浅井朝倉の總軍六万ふ及ひ山門の大衆三四千
合せて六万五千餘人の日粮現米六百五十石二月
万九千五百石四斗苞四万八千七百五十俵なり
九月中旬より十一月下旬ふ及ふ其費を処十四
万六千俵許と知へし山門の富大禍を招く根元
織田方の軍勢も寒氣あつて難澁しと如何も
やしと思ふと勞して對陣せり

重修真書太閤記四編卷之九終

大開言口糸ナナ

二

